

『ベースのかみさんの話』の前口上(下)

海 老 久 人
 浜 口 恵 子
 吉 田 和 男

そんなときわたしはこうもいってやったものです。『ねえ、あなた、ごらんさい。うちの羊のウィルキンちゃんはあるなおとなしくしているのよ。そばへ来たら、あなた。ほっぺにチュしてあげる。いつも辛抱強くおとなしく、少々薬味をきかせて、率先垂範してくださらなくては。だって、ヨブの忍耐についてずいぶん立派なことをおっしゃるでしょう。そんなに上手な説教ができるのですもの。いつも我慢してくださらなくては。あなたがいやなら、いいわ、わたしたち女が教えてあげる。妻と仲良く暮らすのが一番いいことをね。わたしたち夫婦のうちどちらかが当然折れなくてはなりません。殿方の方が女よりは分別があるのだから、あなたが辛抱しなくては。あれこれ不平をこぼしたり、唸ってみてもどうなるっていうの。わたしのあれを独り占めにしたいからなの。それなら、全部おとり。さあ、存分にお楽しみあそばせ。ペトロ様にかけて、ちゃんとかわいがってくれなければ承知しないから。わたしのいいものを売る気になれば、バラの花のようにさっそうと歩いてみせることだってできるのよ。でもわたしはね、あなた一人に味見してもらうためにとっておいてあげているじゃないか。神様にかけて、悪いのはあなたの方なのだから。本当よ。』

(450)

わたしたち夫婦の間でこんなやりとりがございました：さて今度は、四番目の夫のことをお話ししましょう。

(452)

四番目の夫は道楽者で、早い話が、女を困っていたのです。わたしの方

はまだピチピチ、艶気もたっぷり、おまけに強情っぱりで気が強くかささぎのように陽気でした。小さい堅琴にあわせて踊ったりおいしいワインを一杯でもいただければ、そうよ、小夜鳴鳥にもまけないくらい歌をうたうことだって心得ていました。極悪非道のあのメテルリウスは妻がワインを飲んだというだけで、棒で妻を殴り殺したそうですね。でも、たとえわたしがこの男の妻であっても、力づくでわたしからお酒を取り上げるような真似なんかさせるものですか。わたしはワインをいただくと、ついヴェヌスのことを考えてしまいます。寒いとあられが降るように、好き者の口には好き者の尻尾がつきもの。酒の入った女は拒むことを知らずと言いますけれど、好き者ならみな経験でこのことをよく知っています。(468)

ところで、ああキリスト様、派手に遊びまわっていた若い頃を思い出すと胸の奥がきゅっと締めつけられるようです。盛りの頃、この世の快楽を味わいつくしました。それを思うと今でもわたしの心は癒やされますわ。でもなんですわねえ、年にはかきませんわ。なにもかも台無しにしてしまうのですから。わたしの美貌も活力も奪ってしまったのですもの。さあお行き。ごきげんよう。勝手にするがいいのさ。小麦粉の上物はもう売り切れしました。お店(店)はからっぽ。もう売れるものといえば麴(餅)ぐらいですわ。それくらいのこと、このわたし自身がよく承知しています。それでもまだ十分楽しもうと思っています。ところで、四番目の夫の話でしたね。(480)

そういえばこの夫はよその女とも遊んでいたのですよ。わたしは内心穏やかではなかったのです。でも、神様とジュドック聖人様にかけて、ちゃんと仕返しはしてやりました。わたしはみせしめに彼を同じ木でできた贖罪の十字架にしてやりました。実は、体を許すとか破廉恥なやり口とかではなく、誰かれなく愛想をふりまいてやりました。案の定、夫はおのれの怒りと混じり気なしの嫉妬のあまり油の中で天婦羅に揚がってしまいました。神様にかけて、夫にはわたしがこの世の煉獄でした。ですから、夫の

魂が救われればよいと思っています。わたしという靴がひどく窮屈とみえて、ほんと、座りこんで悲鳴をあげていることもしょっちゅうでした。あの手この手でどんなに夫をぎゅうぎゅう締めあげてやったことでしょう。ご存知なのは神様と当の亭主ばかりなり、ですわ。わたしがイェルザレムから戻りますと、この夫は死にました。今は教会の十字架の下に埋められています。もっとも、お墓といっても、アペレスがわざを尽して作り上げたダリウスとかいう人のお墓ほど立派なものではありません。あんな夫の葬式にお金をかけるなんて無駄というものです。さようなら、安らかにお眠り。今はお墓で棺桶の中です。(502)

今度は五番目の夫の話をしませう。神様、どうぞあの人の魂を地獄に落さないで下さい。それにしてもこの夫がわたしに一番つらく当りました。今でも一本一本骨身にしみております。この痛みはいまわの際までずっと続くことでしょう。でも、寝床の中では元氣発洩、奔放でした。わたしのいいものが欲しいときなど、まるめ込むなどお手のもの。ですから、骨という骨を殴ったりしましたけれど、わたしの気持をとり戻すことなどわけありませんでした。わたしはこの夫を一番愛していたのですよ。なにしろ思わせぶりな、愛のけちん坊でした。正直いって、女心というものは色恋にかけてはなかなか微妙にできています。簡単に手に入らないものほど、一日中だだをこねておねだりします。駄目といわれると欲しがり、まとわりつかれると逃げだします。わたしたちは、勿体ぶって、ちょっとずつ品物を陳列するのです。市場が賑えば賑うほど値が上りますもの。物があふれば、値が下るのが道理。利口な女なら誰でもこれくらい知っています。

(524)

五番目の夫のことでしたね。ああ神様、夫の魂に祝福を。この夫とは欲得づくではなく惚れて結婚しました。この人、一時オックスフォードの学僧でしたけれど、学問をきりあげて、わたしの代母のところの下宿するようになってわたしたちの故郷のこの町に住むようになったのです。あの

ひと女の魂をお受けくださいませ。アリスンという名前の方でした。このアリスンおばさんときたら、おかげさまで、人にはいえない心の内を教区司祭様よりもずっとよく知っていたのですよ。この方にはなにもかも洗いざらい秘密を打ち明けましたの。だって、もし夫が壁におしっこをかけたり、命にかかわるようなとんでもないことをしてかしたりすれば、このおばさんや別のしかるべき奥さんや、とてもかわいがっている姪に夫の秘密をなにもかも漏らしてしまったことでしょう。実は、なんどもしゃべったものですから、そのたびに、恥ずかしさのあまり夫の顔は真赤にほてって、そんな大事な秘密をわたしに明かしてしまったことを悔やんでいますわ。(542)

それで以前、ある四旬節のころでした。こういうことが起きたのです。そうそう、わたしは例の代母のところへ足しげく通っていました。相変わらず賑やかなのが好きで、よもやま話を聞きに、三月、四月、五月とずっとよそさまの家から家へとわたり歩いていました。それが、四旬節のある日、代母のアリスンおばさんと学僧のジャンキンとで野原へ遊びに出かけることになりましたの。その四旬節の間中ずっと夫はロンドンに出掛け留守にしていたので、わたしの方はこの時とばかりに遊びまわって、遊び好きの連中を見たり、また向うからも見られたりしました。どこに運がころがっているかわかりませんものね。それで、祝日前夜の徹夜にも祭の行列にもお説教にも巡礼にも奇蹟劇にも結婚式にも出かけて行きました。派手な真赤なガウンをまといましてね。そのガウンには虫も蛾も蛆虫だってつくことはありませんでした。なぜですって。それはね、上手に着ていたからですよ。(562)

さて、わたしの身に起きた事の顛末について話を先に進めましょう。そういえば、わたしたちは野原を散歩してましたの。そのうち、ふざけあうような仲にまでなりました、この学僧とわたし。先々のこともあって、わたしの方から切り出して、未亡人にでもなれば、わたしを妻にすることに

なるというようなことを口にしましたの。だって、自慢ではありませんけれど、結婚についても他のことについても、わたしが備えなしってことはありませんわ。逃げ込む穴を一つしか持たないような鼠の知恵など一文の値うちもないというもの。しくじりでもすれば、万事休すですからね。

(574)

わたしの心を虜にしたとって、手玉にとってやりました。そういった手練手管はおっかさんが教えてくれたのです。一晩中あなたの夢を見たの。仰向けに寝ているとき、わたしを殺そうとしたね。おかげでわたしの寝床は本物の血にまみれてしまった。それでも、わたしにいいことをしてくれるだろうと思っているわ。だって、血は黄金の象徴なり、と教わったもの。こんな風に言ってやりました。こんなこと全部口から出まかせだったのです。そんな夢なんかこれっぽっちも見やしませんでした。ただ、あれこれいろいろとおっかさんが教えてくれた通りにしたまでのことですわ。(584)

ところで、もし、何の話をしようというのでしょうかね。あ、そうそう、話を元に戻しましょう。(586)

四番目の夫が棺台にのせられたときは、わたしも一応女房らしくずっと泣きもし、悲しそうな顔つきもしてみせました。そうすることが習でしたしね。面紗^{めんさ}で顔をおおってもみましたわ。でも、次のつれあいのあてがありましたから涙はほんの少ししか流れませんでした。本当ですよ。

(592)

次の朝、夫は、故人を悼む近所の人たちにともなわれて、教会へ運ばれていきました。例の学僧ジャンキンもその中にいたのです。折りよく彼が棺の後をついていくのを見て、あまりきれいで美しい脚と足首をしているものですから、この時わたしの心をすっかりこの人にあげてしまいました。たしか、ジャンキンは二十(歳?)でした。なにを隠そう、実は、このわたしは四十でした。でも、まだまだ仔馬の歯がありました。そう、わたしの歯はすき間だらけでした。それがわたしには似合いでしたもの。だって、わ

たしはヴェヌス様の印を帯びていましたからね。おかげさまで、気のおおい女でございました。美しくお金があって若くて、とても幸せでした。それになんですよ、夫たちが口を揃えて申しますのに、わたしは素敵な名器の持ち主。だって間違いなく、わたしは感性の点では金星ヴェヌスの相で、気性の点では火星軍神マルスの相をしているのですもの。ヴェヌスはわたしに多情と色好みを授け、マルスは鼻っぱしらの強い生意気な女にしました。わたしの上昇宮は金牛宮で、その中に火星がいたのです。ああ、なんということでしょう。愛が罪だなんて。わたしとしては自分の星まわりの力に影響されて、その気性に従ってきただけですのに。ですから、男っぷりのいいお相手からヴェヌスの奥の院を遠ざけることはできない相談でした。しかも、わたしには顔と他に内緒の場所にも軍神マルスの印があるのです。ですから、神様、きっとわたしをお救い下さいまし。ほどほどに身を焦がすなどということはずで、相手の背が低かろうと高かろうと、色が黒かろうと白かろうと、もうとことん情欲に身をまかせるだけでした。わたしを喜ばせてくれる男なら、どんなに貧しかろうと、身分がどうであれ、いっさい気にとめませんでした。

(627)

どこまで話をしましたかしら。そうそう、その月の終りにめかし屋の素敵な学僧ジャンキンとわたしは盛大なお披露目をいたしました。それで、わたしがそれまで譲りうけたもの全部、土地も財産もこの人に渡したのです。でも、後になってひどく後悔しました。だって、この人はわたしの好きなことはなにもさせてくれないのです。ああ神様。一度など、本の一葉を破ったとあって、わたしの耳をひどくぶったのですよ。その一撃をくらって、耳が聞こえなくなってしまいました。わたしは牝獅子のように強情っぱりで、舌のなめらかさときたら口から先に生れたような女でした。うちの人がいくら言っても、相変わらず一軒一軒遊びまわったものです。そのたびに、亭主はわたしに説教して、古い『ローマ人の物語集』から譬えを引いてはいさめようとするのです。曰く、スルピキウス・ガルルスなる

男は、妻がある日かぶりものも被らず外を眺めているのを目撃したという理由で、離縁をして生涯彼女を捨ててしまった、と。(646)

また、別のローマ人の名前をあげて話をしてくれましたよ。自分にことわりもなく夏祭りに出かけたというので妻を捨てた、とも。それから、聖書を引き合いに出してきて、夫たるもの妻をぶらぶら出歩かせてはならぬ、これは神様が厳命厳禁なさるところ、という調子でかの『集会の書』のこの格言を探し出してきたものです。おまけに、たしかこんなことも言っていましたよ。(654)

『柳の枝で家を建てたり、休耕地で目のみえない馬に拍車をあてたり、妻を靈廟へ巡礼に行かせるような者はみな絞首台で首を締められても自業自得だ』なんて。しかし、馬の耳に念仏。わたしはそんな格言や古い諺なんか一文の値うちも認めません。夫の手をかりて身持ちを匡す気など金輪際持ち合わせてはいませんもの。いちいちわたしの欠点をあげつらったりする人など大嫌い。わたしに限らず、女ならそうですわ、本当よ。このことが夫の癪にさわって、狂ったように怒らせました。それでも、どんなことがあっても夫にがまんする気などさらさらありません。(664)

さあ、トーマス聖人様にかけて、この辺でなぜわたしが夫の本の一葉を破ったのか、そのために夫がわたしを殴ったあげくわたしの耳が聞こえなくなったのか、その真相をお話しましょう。(667)

この夫には、昼といわず夜といわず、興にのってはよろこんで読んでいる本がありました。その本をヴァレリウスとかテオフラストゥスとかいう名前と呼んでいました。それを読んで、いつも、ずいぶん大声で笑っていました。それから、あの『ヨヴィニアヌス反駁論』を著わされた、ローマの学者で教会博士のヒエロニムス聖人様という方がおられました。また、その本の中には、テルトゥリアン、クリシププス、トロトゥラ、それにパリにほど遠くないところで女子修道院長をしていたエロイズという方方も含まれていました。それから、サロモンの『格言の書』、オヴィデ

ィウスの『恋の技法』などたくさん本がありました。これらが全部一冊に綴じられておりました。この夫は、他の俗事から手が離れ暇になると、毎日朝から晩まで悪妻について書かれた本を読むのが日課でした。だから、このひとときたら、聖書に出てくる良妻の伝説伝記よりも悪妻の方をよく知っていました。よろしいですか、だいたい学問をするひとは聖者伝は別として、女房といわず、女と生まれついたもののことをほめることなどないのです。あの獅子の図はいったいどなたが描いたのかしら。どなただったかしら。いいですか、学問をするひとが祈禱室に籠ってなされたように、女が男の話を書く段になれば、アダムの似像たる殿方でもとり返しつかないほど悪しざまに書いてやったことでしょう。水星の申し子と金星の申し子とでは、その影響はまったく正反対ですもの。水星は知恵と学問を愛し、金星は奔放と贅沢を好みます。この二つの星はおたがい違った位置のため、一方が昇っている時他方は沈むのです。ですから、金星がもっとも優勢となる双魚宮では、水星は力がないのです。また水星が昇れば金星は沈むのです。そういうわけですから、女と生まれたものは学者先生からほめられっこありません。まして、学者先生も年をとれば、使い古しの靴ほどのヴェヌスの営みもできないのですもの。それで、腰をおろし、毫碌のあげく、女というものは夫婦の契りを守れないものだ、などと書きたてるのです。

(710)

わたしがあつた本のことと殴られたと先程申しましたけれど、今度こそその本題に戻りましょう。わが亭主殿ジャンキンがある晩炉辺にすわつて本を読んでいました。最初はエヴァのことでした。この女の不始末で全人類は悲慘な目にあふことになり、おかげで、イエズス・キリスト様ご自身は磔の刑にかけられ、心臓の御血で再びわたしたちを贖ってくださったのです。ほら、ここであなたがただって、女が人類の破滅の原因だということがはっきりおわかりになるでしょう。

(720)

次に、サムソンが髪の毛をなくした事の顛末をわたしに読んで聞かせま

した。眠っている間にサムソンの女がはさみで切りとって、この女の謀叛のためにサムソンは両眼まで失ってしまったのです。(723)

また、たしか、ヘラクレスと妻のディアニラのことも読んで聞かせてくれましたわ。彼が火に身を投げて自殺したそもそもの発端がその妻だということです。(726)

また、ソクラテスが二人の女房のために味わった辛苦のことも、ちゃんと忘れずに聞かせてくれました。クサンティパが頭におしっこをかけたいきさつのことです。可哀相に何も知らないこの男ときたら、それでも死んだようにじっとすわったまま頭をぬぐうと、『雷がやまないうちに、ひと雨来たようだ』と言ったきり何も言おうとはしなかったそうです。(732)

クレータの女王パーシパエの物語については、むごったらしいだけに、ことのほかこたえられなかったようですわ。ひどいでしょう。この女王のおぞましい淫乱と快楽ときたら、もうこれ以上口に出すのも憚られるほどです。(736)

情欲のために、夫をだまして死に追いやったクリュタイムネーストラの話なんか、もう彼ときたら熱に浮かされたように読みあげていました。(739)

それに、テーバイでアムピラーオスが何が原因で命を失うはめになったかも話してくれました。私の夫は彼の妻エリピューレーの伝記を持っておりました。彼女は黄金の首飾りをもらって、夫が身を隠している場所をギリシア方に密告したために、夫はテーバイで不幸な最期を遂げたのです。(745)

リヴィアやルキリアの話もしてくれました。二人とも夫を死に追いやったのです。もっとも、一人はいとしさあまってる所行、もう一人は憎しみからですわ。リヴィアは夫を憎むあまり夜更に夫を毒殺しました。愛に溺れやすいルキリアは夫を愛するあまり、彼がいつも自分のことを思ってい

てくれるようにと惚れ薬を一服飲ませたのです。ところが、夫は夜明け前に絶命してしまつたのです。かくして夫たるもの万事につけ憂き目にあうもの。

(756)

それから、ラトゥミウスとかいう男が友達のアルリウスにこぼした不平の次第についても話してくれました。それによると、庭に一本の木が植わっていて、その木で三人の妻がうらみつらみのあげく首を吊つたのです。この男はかく申しました。こちらアルリウスの方は『おい君、そんなおめでたい木なら一本切り枝をおくれ、うちの庭にも植えたいんだ』と言つたそうです。

(764)

近頃も夫はこんな女房たちのことを読みあげていました。そう、寢床の中で夫を殺し、その死体を床に仰向けに転がしたまま一晚中情夫と乳繰りあつた女房。それから、なかには夫が眠りこんでいる間に、脳天に釘をうちこんで殺した女房。夫の酒に毒を盛つた女房の話などもありました。思ひもよらないようなひどいことを口にしました。それに地上に生える草木よりも沢山の諺を知っていました。『がみがみ女といっしょに住むくらいなら、獅子や身の毛もよだつ竜と住んだほうがよい。』『癩癩女と下の土間で鼻をつきあわせているより、天井の高いところにいるほうがまだ。女は性悪、天邪鬼。亭主気に入りゃ、女房いやがる。』『下着をとるとき、恥もいっしょ。』おまけにこんなことも言いました。『貞節なき美女、牝豚の鼻にかかる金の輪なり。』わたしの胸の内のくやしき、痛みをいったいどなたが信じて想像してくださるかしら。

(787)

こんないまわしい本を夜の目も寝ずに読むのをやめそうにないのがわかると、夫が読み耽けている最中にわたしはいきなりその本から三葉ひきちぎってやりました。そして、頬めがけてげんこつをくらわせてやりました。すると、夫はうしろへよろけて炉の中に尻もちをついてしまいました。夫は怒り狂つた獅子のように起きあがって、げんこつでわたしの顔を殴りつけ、わたしは死んだように床の上にのびてしまいました。夫はわたしが

身動きしないのを見てぎょっとし、やっと息を吹き返した頃には今にも逃げださんばかりでしたわ。わたしは言ってやりましたの。『ああ、この盗人め、わたしを殺す気かえ。土地を目当てにこうやってわたしを手に掛けたんだね。せめて死ぬ前に口づけをしてあげよう。』 (802)

すると、夫はそばに寄ってきておずおずと跪いて言いました。『ねえ、いとしいアリスン、ご免ね。もう絶対おまえを殴ったりはしないよ。僕がこんなことをしてかしたのも、もとはといえばおまえのせいなんだ。許しておくれ、この通りだ。』すかさずもう一度、わたしは頬をひっぱたいて言ってやりました。『盗人め、これでおあいこだよ。ああ、もうだめ、口もきけない。』でも、結局、大変な辛苦をなめたあげく、二人だけで仲直りをいたしました。夫はいっさいの支配権をわたしの手にゆだねてくれて、家や土地をはじめ、彼の舌や手にいたるまでわたしが管理することになりました。それに、すぐさまあの本も焼かせましたわ。こうしてわたしが奥の手で全主権を獲得した時、夫はこう言いました。『正真正銘の僕の奥さん、これからは一生おまえの気が済むようにおやり。ただおまえの素行を慎んで、僕の顔もたてておくれ。』その日をしておにわたしたちはきっぱりと諍いはやめました。おかげで、わたしはこの夫に対して、デンマークからインドまで、どんな妻にもひけをとらないくらい優しい誠実な妻になりましたし、彼の方でもわたしに対してそうしてくれました。栄光の座におわす神様、どうか後生ですから、この夫の魂を祝福して下さい。さて、いよいよこれからわたしの話をはじめましょうか。どうかお聞き下さい。』

(828)

教会裁判所召喚吏と托鉢修道士との

やりとりをご覧あれ

これまでの話をすっかり聞き終った時、托鉢修道士は声をたてて笑いま

した。「いやはやおかみ、これはすっかり楽しませてもらったものだ。それにしてもずいぶん長い前置きだね。」托鉢修道士が大声をだすのを聞いて、教会裁判所召喚吏は言いました。「ほら。まったくもって、托鉢坊主ときたらいつもでしゃばりたがるものだ。ねえ、みなさん、蠅と托鉢坊主はどんな皿にもどんな事柄にも首をつっこむのですからね。前置きがどうしたって。何を言ってるんだ。側対歩だろうが跑足(だつ)だろうが、黙ろうが、すわろうが勝手にしろ。おまえはこんな調子でわれわれの楽しみに水を差すんだ。」 (839)

「やい、召喚吏、それがおまえの望むところか」と托鉢修道士は言いました。「そういうことなら、でかける前にきっと召喚吏の話の一つ二つして、ここにいるみんなを大笑いさせてやることにしよう。」 (843)

「そうかそれなら坊主、おまえの面を呪ってやる」とこの召喚吏は言いました。「おれの方でもシテングボーンに着く前に托鉢坊主の話をつつしなれば、おれの顔がたたない。そしたらおまえも心底悲嘆にくれるというわけだ。おおかた勤忍袋の緒が切れたようだな。」 (849)

われらが宿の亭主殿が叫んで申しました。「お静かに。それも今すぐに。このお女中に話してもらいましょう。あなた方、もうだいぶんビールの酔がまわってるようですな。どうぞおかみさん、話を始めて下さい。それが一番だ。」 (853)

「いいですとも、亭主殿」と彼女は言いました。「もしこのご立派なお坊さんのお許しをいただけるなら、ご希望どおりにね。」 (855)

「もちろんですよ、おかみさん」と托鉢修道士は言いました。「おやんなさいよ、うかがいますから。」 (856)

ここでバースのかみさんは彼女の
前口上を終える